

平成 28 年度 活動報告書

「アジアと日本の農山村問題を相互啓発実践型地域研究で学ぶ」

(プログラム 1 : 京滋の在地に学ぶ実践型地域研究、2 : 自然と文化ー農の営みを軸にー、3 : ブータンの農村に学ぶ発展のあり方、4 : 在地の参加型実践研究で学ぶ過疎・離農問題、)

安藤和雄 (東南アジア地域研究研究所)・岩田明久 (大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)・竹田晋也 (大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)・坂本龍太 (東南アジア地域研究研究所)・矢嶋吉司 (東南アジア地域研究研究所)

全体プログラムの構成

「アジアと日本の農山村問題を相互啓発実践型地域研究で学ぶ」という全体プログラムの傘下のもとに、個別プログラムとして(「まなびよし」プログラム 1~3 講義、「いきよし」プログラム 4 講義)として、以下の 4 つのプログラムを企画し、講義とそれに関係する準備や研究活動を実施した。プログラム 1 京滋の地域の人々の活動に学ぶ「京滋の在地に学ぶ実践型地域研究」(ILAS ゼミ 前期月 3、単位 2、担当安藤和雄)、プログラム 2 世界の農業の諸問題を地域との関連で学ぶ「自然と文化ー農の営みを軸にー」(H28、29 年開講 全学共通科目 前期水 2、単位 2 担当竹田晋也)、プログラム 3 海外の農村にでかけて国際交流の中で京都の農村問題を考える「ブータンの農村に学ぶ発展のあり方」(ILAS 国際交流科目 後期集中 単位 2 安藤和雄・坂本龍太)し、プログラム 4 「在地の参加型実践研究で学ぶ過疎・離農問題」(ILAS ゼミ、前期集中)を本年度準備している。これらのプログラムを個別に企画申請した。

全体プログラムの課題と活動概要

京都府、滋賀県下の農村地域においても、農業離れ、過疎化、高齢化、耕作放棄地の増加、林地の放置などは進み、その影響により、地域に根ざし農村で育まれてきた生活文化や生活技術(伝統芸能、食文化、棚田などの農耕技術、林野利用技術、灌漑水利施設の維持技術)が消滅の危機に瀕している。他方、農村伝統文化を基軸とした地域再生活動が各地域から個別におきつつある。こうした動きに応じて、都市文化の模倣ではない、新たな発想に基づく「伝統文化に基づく地域再生活動」を実践・支援し、大学教育における人材育成を盛り込んだ再生モデルとして一般化し、他の地域にも応用できるような仕組みをつくるのが、地域に根ざした大学としての火急の課題であるとする。このことを実現していく上で、既存の I L A S ゼミや全学共通科目、ILAS 国際交流科目を平成 28 年度として開講、平成 28 年度開講のために関連した地元の人々から学ぶためのスタディ・ツアーおよび参加型農村調査、参加型ワークショップ

ブ、集落機能や農耕地の維持のためのボランティア実践活動のアクション・リサーチ、資料作成などをそれぞれ開講の講義別に行う。平成 28 年度の特記事項としては、京大 COC 事業との補完関係にある私が代表を務める次の二つの事業（京都府・宮津市・京都大学 1 まち 1 キャンパス事業「大学・地域連携プロジェクト支援」事業：『農山村学生実習のための「丹後アジア研修拠点」形成事業』および科研費 A「アジアの在地の協働によるグローバル問題群に挑戦する実践型地域研究」と関連し、これらの事業と補完関係を保つように本事業が実施された。また、本プログラムは日本国内の視点からだけではなく、ブータン王立大学シェラブッチェ校との学術協定に依拠して、京都大学とシェラブッチェ大学との教員・学生とのそれぞれの国の現場での交流活動を行い、国外からの視点を学ぶことも重視している。また、平成 28 年度には京都大学 COC 事業が企画した中学生を対象とした 2016 年 10 月 29 日（土）に開催された京都市との連携による京都大学ジュニアキャンパス 2016 にも積極的に参加し、本事業に参加している安藤和雄と坂本龍太が講義を行っている。特に安藤は本プログラムと直接に関係するテーマ「日本の過疎と農業離れ問題に学ぶ」で、平成 28 年夏にブータンの若者が京滋農村で学んだ様子を報告し、グローバルな視点から過疎と農業離れ問題を、中学生とともに考えてみた。

参加学生の到達目標

「日本の地域再生の草の根の活動の実例を学び、ブータンと日本における過疎問題、離農の問題の基本的な事項についても理解する。実践型地域研究の手法についても学ぶ。課題（講義内での発表等）に対して、自主的、継続的取り組む能力を養う」と設定し、いずれも十分な成果を得ることができている。

個別プログラム

プログラム 1：京滋の在地に学ぶ実践型地域研究

課題

本プログラムは東南アジア地域研究研究所が地元と協働運営している亀岡、守山、朽木、南丹市美山町の農村部で、各 NPO、自治会、集落住民との協働で運営しているフィールドステーション事業と科研プロジェクト「アジアの在地の協働によるグローバル問題群に挑戦する実践型地域研究」（安藤代表）などと協働実施する。①講師招へい：講師には、各フィールドステーションの関係者を招へいする。京都学園大学教員、NPO のプロジェクト保津川や平和もやいネットのメンバー、南丹市美山町知井振興会事務局長、滋賀県守山市美崎自治会会長らに講義を依頼する。②現地見学：京都府の中山間村のもっとも大きな課題となっている集落維持、放棄地の維持と地元の人たちとの交流、地元の人たちからその経験を学ぶために、美山町知井地区において、放棄地の見学、知井振興会での聞き取りや、振興会事務局長からの講義などを聴講する。また、丹後半島の上世屋地区で過疎と放棄地の実態を学習する。③交流会：プログラム 3 の関連で招へいするブータン王立大学シェラブッチェ校の講師や若手研究員、プログラム 4

の集中講義の参加者との合同で、過疎問題・離農問題に関する交流会を行う。④月例研究会 5月より、毎月（12月と8月は休止）、東南アジア地域研究研究所において京滋フィールドステーション実践型地域研究会を講師を招き17:30以降の夕方に開催する。④教材作成 国際会議や東南アジア地域研究研究所実践型地域研究推進室が作成するニューズレターや関連の国際会議、ワークショップなど報告書を可能な限り他の事業と協働して印刷する。

成果

本プログラムは、東南アジア地域研究研究所実践型地域研究推進室が亀岡、守山、朽木、南丹市美山町の農村部で各 NPO、自治会、集落住民との協働で運営している京滋フィールドステーション事業及宮津市との連携ですすめている一まち一キャンパス事業と協働実施した。美山町知井振興会事務局長河野氏を講師として招へいた。また宮津市や美山町での京都大学の学生やブータンのシェラブッチェ王立大学からの若手研究者の調査準備のために東南アジア地域研究研究所の赤松氏に協力を依頼した。本事業全体の Web などの情報発信の整備を東南アジア地域研究研究所の内田氏の協力を得て、本事業全体のホームページを作成して発信を開始した。本プログラムの講義に参加している学生たちは、京都府の中山間村のもっとも大きな課題となっている集落維持、放棄地の維持について日本の状況や合わせて日本の文化を学び、プログラム3で招へいたブータン王立大学とシェラブッチェ校の講師・学生（若手研究員）との交流を行った。滋賀県守山市美崎地区で守山市役所、美崎地区住民らと共同で実施している大川活用プロジェクトの2016年度活動報告書を教材作成の目的で印刷した。

ホームページ：https://pas.cseas.kyoto-u.ac.jp/activity/HP_chinokyoten/index.html



上世屋の棚田で農家から話を聞く受講生たち

大川活用プロジェクト報告書
<https://pas.cseas.kyoto-u.ac.jp/data2/2017ohkawa.pdf>

平成28年度 大川活用プロジェクト活動報告書 —大川新川の新たな展開に向けて—



美峰自治会、守山市、立命館守山中学校・高等学校
滋賀県立大学農産学部環境建築デザイン学科、
京都大学（グローバル生存基盤展開ユニット・東南アジア地域研究研究所、
地（知）の拠点事業：KYOTO未来創造拠点整備事業—社会変革期を担う人材育成、東南アジア地域研究研究所国際共同研究拠点事業「東南アジア大産物
備作種における農業近代化以降における技術展開の国際比較」）



プログラム2「自然と文化―農の営みを軸に―」

課題

京滋の農山村が抱える問題を学ぶためには国際的な視野に立って世界の農林業に京滋の農業を位置づけることが必要である。また、農林業は、生物生産を通じた技術的体系あるいは経済的営為であるだけでなく、自然と深く関わってきた歴史の所産としての文化という側面をもち、その営みを通じて地域の環境形成やその維持にも大きな役割を果たしてきた。国内外での多様なフィールドワークにもとづいて、地域の環境や文化の形成・維持に果たしてきた農林業の役割を明らかにしつつ、「農」の営みをもつ現代的な意義と意味を竹田他7名がリレー講義によって世界各国でのフィールドワークを報告している。以下の活動で来年度以降の講義の充実を図る。

①国内の研究会などの共同開催のための講師招へい旅費

本課題に関して他の国内研究会との研究会を共同開催する。そして、その成果を講義に活かす。

②国内農林業調査旅費

講義では世界の農林業と日本国内との比較の視点を取り入れているので、国内各地域の農林業調査を実施する。

③国内外の「自然と文化―農の営み―」に関する資料の整理

本課題に関して国内外の文献図書資料を購入参照して、その成果を講義に活かす。

成果

東南アジアは世界屈指の漁業生産地帯である。年間漁業生産量は1,600トン余りで全世界の約2割を占め、沿岸部や河川周辺の地域住民はタンパク質のほとんどを水産物に依存している。1980年代になってエビ養殖技術が急速に普及し、マングローブを侵襲した集約的エビ養殖池の建設が相次ぎ、これにもなって水質汚濁、塩害、病気の蔓延などの生態系の擾乱が進行するなど様々な社会問題が顕在化した。一方で水産物や木材などの生態系資源は減少傾向を示し、1975年に3,100m²あったタイのマングローブ林の面積は20数年の間に1,600m²まで半減し、漁獲技術が向上しているにもかかわらず捕獲漁獲量は減少傾向を辿っている。

機械化された近代化の漁業が発展・普及する一方、河川域や沿岸域においては依然として伝統的な漁具・漁法を用いた地域住民による小規模な漁業が続けられている。本講演では、近年、森林総合研究所、京都大学、チュラロンコン大学、カセサート大学らと共同で行ってきた現地調査に基づいて、地域住民と密接に関わり合った伝統的な小規模漁業や養殖業について話題提供したい。

内水漁業の事例として、タイ東北部ワット・カムクワンクオオナーケー村を中心に、メコン川支流のひとつであるラムセバイ川周辺で見られる62種類の魚のぼろ・兼法について概観し、とくに河川流路を利用した定置網漁(ラン・ローブ)など、地域住民の生活に密着した特色ある小規模漁業の実態を明らかにする。一方、沿岸漁業の事例として、タイ南部ラーン・農アダムン海沿岸のカンブアン地区のマングローブ林周辺で見られる様々な漁具・漁法を用いた小規模漁業を紹介するとともに、土地利用の変遷や養殖施設の建設経緯などについて明らかにする。さらに、タイ中部サムソクラン県において実施した集約的エビ養殖の実証実験を交えて、養殖業の展望について考えたい。

日時
2017年2月7日(火)
16:00～18:00

場所
京都大学総合研究2号館4階AA447

お問い合わせ先
小坂：京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
kosaka[at]sas.f.u.ac.jp
柳澤：京都大学地域研究総合情報センター
masa[at]cias.kyoto-u.ac.jp

京滋の農山村が抱える問題を学ぶためには担当教員が専門とする地域研究の立場から国際的な視野にたつて世界の農林業に京滋の農業を位置づけることが必要である。世界の多様な地域の環境や文化の形成・維持に果たしてきた農林業の役割を明らかにするために、国内の研究会など共同開催しての情報収集、国内外でのあらゆる機会でのフィールドワークや資料による地域情報の収集、地域に関連する現地情報や考え方等々の図書資料を活用することが不可欠である。この観点から様々な図書資料の購入、10月の担当教員の鹿児島での学会への出席とそれを活用した鹿児島と2月の水俣でのフィールドワーク、他の研究会でのグループ討論を活性化させるための10月にミニバスをレンタルして研究会を比

2016年度に開校した講義の各コマの個別テーマ

1. イントロダクション (竹田晋也)
2. ブータンから京都の農林業と農山村を考える (安藤和雄)
3. 農業の歴史に学ぶ (小坂康之)
4. 非木材林産物と資源管理 (竹田晋也)
5. 水田稲作と水域生態系 (岩田明久)
6. 東南アジアの水産資源とその利用 (岩田明久)
7. アジアの水田稲作と「緑の革命」(小坂康之)
8. 「常緑の革命」としてのアグロフォレストリー (竹田晋也)
9. アジアの市場から地産地消を考える (小坂康之)
10. ヒマラヤの暮らしの変容 (小坂康之)
11. マングローブ林の地域生態史 (竹田晋也)
12. コロンブスの交換 (小坂康之)
13. 自然環境に適応した農のある暮らしの再評価 (安藤和雄)
14. 人類世と生存学 (竹田晋也)
15. 期末試験:各担当教員が1題ずつ出題する問題のなかから2つを選び、論述形式で回答する試験を実施した。

叡山で実施し、2月7日には第178回東南アジアの自然と農業研究会2月例会を共催し、国立研究開発法人水産研究・教育機構増養殖研究所の藤岡義三氏を講師として招へいした。こうした調査や学会、研究会で得られた資料を講義「自然と文化—農の営み—」にいかす準備を行うことができた。

プログラム3「ブータンの農村に学ぶ発展のあり方」

課題

本プログラムは国際交流科目との協働で実施される。京都大学学部生を2017年3月に約2週間の間、ブータン王立大学シェラブツェ校が受け入れとなり、ブータン国のタイシガン県の農村をスタディ・ツアーするとともに、国内では、科研プロジェクト「アジアの在地の協働によるグローバル問題群に挑戦する実践型地域研究」(安藤代表)などと協働し、ブータンの現場での国際交流を通じて過疎、離農の問題を経験的に実感することで自覚を促進するための課題である。ブータン王立大学シェラブツェ校から講師、学部生(若手研究員)を7月中旬から8月上旬の約2週間と2017年2月に2週間の招へいし、スタディ・ツアー参加型農村調査と学生・村人との交流、雪下ろしボランティア実践のアクション・リサーチへの参加する課題を設定した。尚、シェラブツェ校からの招へい者については、宮津市、伊根町、南丹市、守山市の集落をスタディ・ツアーおよび参加型調査も計画した。

成果

本プログラムはILASの海外科目との協働で実施され、7名の京大生が2月27日から3月16日の間、ブータン王立大学シェラブツェ校の受け入れでブータン国タイシガン県の農村をスタ

ディ・ツアーし、その引率を安藤が行った。その連携プログラムとして、ブータン王立大学シェラブツェ校から7月22日～8月7日及び2017年1月18日～2月2日に講師と学生（若手研究員）の計4名を招へい、宮津市、南丹市美山町、滋賀県守山市美崎などの農村で参加型農村調査（PRA）を実施し、地元の行政、自治会の方々、京都大学の学生とも交流した。また、一まち一キャンパス事業が主催した地元への成果還元ワークショップで報告した。

尚、ブータンでの ILAS 海外科目は以下の論文として発表し、シェラブツェ校からの招へいプログラムの成果は以下の学会発表の短報として公刊された。

安藤和雄、平田二千翔、中村将志、阿部梨奈、高柳志帆、柏木真穂、門間ゆきの、岡和來、坂本龍太、2018、GNH を考えた旅—京都大学 ILAS セミナー「ブータンの農村に学ぶ発展のあり方」2016 年度現場スタディツアー参加者の覚書報告集一、ヒマラヤ学誌 No.19:185-213
https://pas.cseas.kyoto-u.ac.jp/member_gyoseki/ando/ando20180328.pdf

Kazuo Ando, Yoshio Akamatsu, Haruo Uchida, Sumjay Tshering, Pema Choden, Tenzin Wangchuk, 2016, Depopulation and Abandoning Farming Problem as a Global Issue: Bhutanese Scholars' Comparative Experience in Japan, Summer 2016, Research for Tropical Agriculture, Vo.9, Extra issue 2: 19-20.
https://pas.cseas.kyoto-u.ac.jp/member_gyoseki/ando/TropcAgriVol9.pdf

Kazuo Ando, Yoshio Akamatsu, Haruo Uchida, Bimal K Chetri, Tanka Nath Dhital, Tashi Yangzom, 2017, Depopulation and Abandoning Farming Problem as a Global Issue: Bhutanese Scholars' Comparative Experience in Japan, January 2017, Proceedings of the 27th Annual Meeting of the Japan Society of Tropical Ecology in Awami 2017:74.
https://pas.cseas.kyoto-u.ac.jp/member_gyoseki/ando/amami2017June.pdf

プログラム 4 : 在地の参加型実践研究で学ぶ過疎・離農問題

課題

本プログラムは 丹後半島の宮津市上世屋地区を中心とする過疎集落等の参加型農村調査を学習課題とした。学習の目標は、1) 現場集落、行政、自治会、NPO などへの聞き取りと参加型農村調査と学習とボランティア活動により「参加型実践研究」を経験的に体験することで、日本における過疎・離農問題の現実を実感として理解する。2) PLA (参加型学習行動法) やボランティア活動の実習を通じて、アクションを通じた学び方の入門を学ぶ。3) 講義の現場では、地形や生態の観察、村人からの聞き取りなどの記録のフィールドワークとフィールドノートのつけ方を学ぶ。

本プログラムは集中講義の形式で8月5日から8月8日にかけて参加型農村調査(PRA)とボランティア学習として計画された。また、ブータン王立大学シェラブツェ校の講師と学生(若

手研究員)を招へいし、日本の過疎、離農問題を現場で学び、京都大学学部生と交流するという課題を設定した。

成果

プログラム4の主な内容は8月5日～8日の間、ILASゼミ「在地の参加型実践研究で学ぶ過疎・離農問題」で宮津市役所で概況説明を受けたのち、世屋地区の木子、下世屋の移動スーパーなどでの聞き取りを中心に、朝市、宮津市内の景観観察調査実習を学生4名教員2名で参加型現場実習型講義「いきよし」として実施した。調査実習時に地元の自然観察ガイド資格者の赤松氏にフィールドでの講師を依頼した。当初予定していた学部学生等の宿泊経費は2016年度も本事業では負担することができなかつたので本事業との連携事業である一まち一キャンパス事業から学生の宿泊経費などを確保した。ブータン王立大学シェラブツェ校から講師と学生(若手研究員)の合計4名を1月17日から2月2日の間招へいし、宮津市、南丹市美山町、滋賀県守山市美崎で参加型農村調査(PRA)を実施し、かつ、宮津市との連携で1月28日開催された国際ワークショップに参加・発表を行った。

**『農山村学生実習のための「丹後アジア研修拠点」形成事業』国際ワークショップ
ブータンとの比較で考える過疎・農業離れの問題**

日時: 2017年1月28日(土)
13:30 ~ 16:00(受付開始13:15~)

会場: 宮津市保健センター
(宮津市字鶴賀2109-2)
主催: 京都大学、ブータン王立大学
シェラブツェ校
協力: 宮津市、京都府



13:30 開会
13:30-13:35 歓迎挨拶
14:35-13:40 趣旨説明
13:40-13:55 平成28年度研修活動報告
13:55-14:15 ブータンでの農業を通じた国民総幸福(GNH)の実践事例
14:15-14:35 サムドロップジョンカ・イニシアティブに見るブータンの農村開発
14:35-14:50 休憩
14:50-15:10 ブータンからみた京滋・宮津の農山村
15:10-15:25 京都大学の学生たちと考えたブータンと宮津の農山村問題(仮題)
15:25-15:40 農山村問題とまちづくり(仮題)
15:40-16:00 質疑応答・総括
16:00 閉会

問合せ先: 宮津市企画部企画政策課 ☎ 0772-45-1664 Email k-tyousei@city.miyazu.kyoto.jp



下世屋の移動スーパーで話を聞く学生たち
(2016年8月6日)

2017年1月28日に開催された宮津市内でのワークショップ、30名余の市民が集まってくれた。